



学校法人中越学園

長岡大学

令和3年度 学生による地域活性化プログラム

広田秀樹ゼミナール 活動報告書

グラスルーツ グローバルイゼーション

— 草の根・地域からの人類一体化の推進 —



06

令和3年度

ごあいさつ



長岡大学 学長 村山 光博

長岡大学の「学生による地域活性化プログラム」は、3、4年次の専門ゼミナールに所属する学生グループが、地域課題の解決や地域の魅力創出に向けた調査研究と具体的な活動を行うことにより、学生の職業人としての基礎的能力向上と地域活性化への貢献を同時に目指すプログラムです。本プログラムは2007（平成19）年度に導入してから、これまで十数年に渡り継続しながら発展してきた本学の特徴的な教育プログラムの一つであります。最近、取り組みの中心でもある地域の現場における学生の諸活動を新聞やテレビ、ラジオ等のメディアでも取り上げていただく機会も増えてきました。また、これまで本プログラムの運営に多大なるご支援ご協力をいただいていた地域連携アドバイザーをはじめ地域の皆様から、これらの取り組みに対する激励のお言葉をいただいております。長きにわたりこの取り組みを続けて来られたのは、ひとえに地域の皆様の暖かいご支援とご指導の賜物と、心より感謝申し上げます。

「地域活性化とは」という問いに対する明確な答えを述べることはなかなか難しいのですが、本プログラムでは、答えのない様々な地域課題に対して、それら課題の原因をどのように捉え、どのように行動を起こして対応していくのかについて、学生が自ら体験することができます。卒業後には地域社会の一員となる学生たちが、将来、各職場や地域コミュニティの中にあるそれぞれの地域課題に取り組むことになる考えると、これらの体験は彼らにとって大変貴重なものとなることでしょう。

本プログラムでは、各ゼミナールで設定したテーマの下で学生グループが活動を進めていくこととなりますが、時には一緒に活動する学生同士のちょっとしたすれ違いや地域の大人たちとの意見の食い違い等も起きることがあります。このような体験も学生がさらに一歩、人として成長するためのきっかけとなります。各グループで決めたテーマをまとめ上げるために、どのように他者と協力しながら取り組みを進めていくべきなのか、このグループの中での私の役割は何か、などを考えながら活動を行っていくことで、グループで活動することの難しさだけでなく、グループで目標に向かって何かをやり遂げることの充実感や達成感を味わうことができます。

長岡大学の「学生による地域活性化プログラム」では、学生が地域に飛び込んで地域の皆様と一緒に汗をかき、楽しみ、そして考える中から、目先の地域貢献活動だけでなく、将来にわたって地域の活性化を担っていく事のできる人材の育成を目指しております。本学の建学の精神は、「幅広い職業人としての人づくりと実学実践教育の推進」と「地域社会に貢献し得る人材の育成」です。本プログラムは、まさにこの精神を実現するための中核となる教育プログラムであると言えます。

本活動報告書は、各取組テーマの調査研究活動の概要とその成果について学生が執筆した報告書を集めて一冊にまとめたものです。ぜひご一読いただければ幸いです。

なお、本プログラムは「NaDeC 構想推進コンソーシアム産学協創ワーキング」から補助をいただいたことを申し添えます。

2022年3月



長岡大学は、文部科学大臣の認証を受けた『公益財団法人日本高等教育評価機構』により、平成28年度大学機関別認証評価を受審し、平成29年3月7日、日本高等教育評価機構が定める大学評価基準を満たしていると「認定」されました。

はじめに

グラスルーツグローバリゼーション ー草の根・地域からの人類一体化の推進ー



長岡大学教授／ゼミ担当教員 広田 秀樹

広田ゼミナールでは長年に渡り、「グラスルーツグローバリゼーション：草の根・地域からの人類一体化の推進」を大局的テーマに掲げ、ゼミ活動を進めてきました。

大局的テーマに沿って、歴代のゼミ生たちは具体的活動に関して、柔軟に変化させ活動に取り組み「世界的視野」を拡大してきました。

近年のコロナパンデミックは、ゼミ生に強い考察の意識を芽生えさせました。ゼミの伝統である多様なテーマを設定しての自由な研究発表、自由討論で白熱したのは、コロナパンデミックについてでした。

いくらグローバル化が高度化したからといって、「周囲約4万キロという地球のスケール」を考えたとき、はたしてこんなに迅速にウイルスが拡散するものか？

医療、衛生、福祉などで世界の先進を走る、西洋諸国家で早期に深刻化するのなぜか？なぜ連続的に「変異株」が発生するのか？

世界経済は打撃を受けているが、巨大企業等のセンセーショナルな倒産等は少なく、世界経済のファンダメンタルは維持されているように見えるのなぜか？

仮説やその証明の論理なども含め、実に深くゼミ生はこのテーマを考察しました。一方で、国際的体験（international experience）を有するゼミ生が、世界的なコロナショックのなかで落胆したのは、直接的海外渡航が困難になり、世界的視野を拡大することが決定的に阻止されたという一点でした。

しかし逆に、この落胆の意識を打ち破り、地域の中で「世界」をさがし、それを切っ掛けに「世界」を学び「世界的視野拡大」をしようという思考に転換することができました。

ここから本年度の活動テーマは、「長岡で体験する『世界』』となりました。具体的には、「世界から長岡・地域にきてくださった方」と交流したり、世界を実感する場所に向いたりして、それらを契機に関連事項を徹底して学び、世界的視野を拡大しようということになりました。

実際、本年度は、ウズベキスタン、アメリカ、インド、ネパール、ベトナム、タイの方と交流・対話ができ、それら6カ国に関して、ゼミ生は Past（過去・歴史）・Present（現状：地理的特性・経済・政治・社会・文化など）・Future（未来）の視点から、深く学習し世界的視野を拡大しました。

ゼミ生はどこの国にも、歴史的・地理的特性からの「広義の文化」があることを理解し、それを学ぶことへの喜びを実感したようです。

ゼミ生はそのような活動で得た「世界的視野拡大」の「知識」を地域に展開することで、国際理解推進に貢献できないかと考えるようになりました。

そこから、地域リーダーの方との「インド・ネパールに関する学習会」や、児童養護施設での「フランス・ヨーロッパの紹介の活動」を行うことになりました。

本年度も、ゼミ生達は「グラスルーツグローバリゼーション」の地域活性化プログラムの活動を通じて、力強く大成長しました。

青春時代に夢やロマンを掲げ情熱と前進への意欲にあふれ生きるゼミ生の姿にふれ、生涯それを持続できる人が人生の勝利者ではないかと、教えられました。

2022年3月

広田秀樹
ゼミナール

グラスルーツグローバル化 —草の根・地域からの人類一体化の推進—



【参加学生】 21名(4年生12名、3年生9名)
 4年生 尾木和磨、王懿倫、佐野広樹、鈴木清和
 武石大夢、中野琉星、丸山壮史、皆川春輝
 Tran Phuong Thao、张贝琪、李思萌、華夏
 3年生 于有為、夏镜颜、黄舟、张娜、张苗苗
 于涵、郭浩、侯建业、許書豪

【アドバイザー】
 Green Philosophy 代表 大出恭子 氏
 フェアトレードショップら・なぶう オーナー 若井由佳子 氏

本年度の活動テーマ:長岡で体験する「世界」



★世界から長岡・地域にきてくださった大切な方と交流<地域国際交流活動>
 ★地域の世界を実感する場所へ訪問<地域国際発見活動>

-ウズベキスタン・ムミナ女史-

-アメリカ・バーゲット氏-

ベトナム・エン女史-



<地域国際交流活動・地域国際発見活動>を契機にした「世界的視野拡大への集中学習」
 「食文化を通じた世界平和」の資料の作成



「世界的視野拡大関連知識」の地域への展開<国際理解推進活動>

-地域リーダーの方との国際理解の学習会-

-児童養護施設での国際理解推進活動-



グラスルーツグローバルイニシアチブ
－草の根・地域からの人類一体化の推進－

広田ゼミナール

参加学生：14K018 尾木和磨、18K018 オウイリン、18K053 佐野広樹、18K060 鈴木
清和、18K069 武石大夢、18K089 中野琉星、18K102 丸山壮史、18K105
皆川春輝、18K301 Tran Phuong Thao、18K302 チョウカイキ、18K305
リシメイ、18K401 カカ
19K012 ウユウイ、19K026 カキョウガン、19K032 コウシュウ、19K069
チョウナ、19K070 チョウミョウミョウ、19K301 ウカン、19K304 カク
ゴウ、19K306 コウケンギョウ、19K402 キョシヨゴウ

目 次

1. 全員の研究発表と本年度活動テーマ「長岡で体験する『世界』」の設定	1
2. ウズベキスタンのムミナ女史との交流：ウズベキスタンを学ぶ	3
3. アメリカのバーゲット氏との交流：トランプ政権の歴史的意味を考察	8
4. インド料理店創業者ビマール氏との交流：インド・ネパールを学ぶ	12
5. ベトナムのエン女史との交流：ベトナムを学ぶ	19
6. タイのアノン女史との交流：タイを学ぶ	24
7. フェアトレードの学習	26
8. 地域での国際理解推進活動Ⅰ：市民リーダーとの学習会	26
9. 地域での国際理解推進活動Ⅱ：児童養護施設での国際理解推進の取り組み	27
まとめ	28
謝辞	29

グラスルーツグローバルゼーション

-草の根・地域からの人類一体化の推進-

1. 全員の研究発表と本年度活動テーマ「長岡で学ぶ『世界』」の設定



私達のゼミでは、グラスルーツグローバルゼーションというテーマのもと、10年以上にわたり様々な活動を行ってきた。

2019年末以来、全世界がコロナパンデミックに見舞われ、わたしたちの活動も大幅に制限されてきた。

具体的な活動については、毎年、大胆に変化させるというのがゼミの伝統だったので、まず全員が、「グラスルーツグローバルゼーション」に関するあらゆるテーマを設定し、自由に研究し、その研究成果を発表し、活発にディスカッションを行った。

自由研究・研究発表の中でやはり、多くのゼミ生が関心をもったのは、コロナパンデミックについてだった。

コロナパンデミックをどう考えるかについて、議論が白熱した。

いくらグローバル化したからといっても、地球の大きさをかんがえたとき、こんなに短期間に新型コロナウイルス、その変異株が、全世界にひろがることに疑問をもった。

当初、北米・欧州で感染者が非常に多いのとは対照的に、日本で感染者が相対的に少ないことや、発展途上国の状況の情報が少ないことなどにも疑問がわいた。

複数の国際機関の対応に迫力がないことにも、気が付いた。

国際政治では、世界全体で団結して克服しようという方向より、米中対立を中心に、対立や分裂の傾向が発生していることも理解できない。

世界経済全体は失速しても、巨大企業等の衝撃的な倒産、崩壊がない。なぜか？

コロナパンデミックは、世界の交流を遮断したようにみえたが、ZOOMなどの情報通信技術によって、情報交流の面ではマイナスは小さくてすんでいる。

しかし、直接的な人間の国際交流はストップしている。

コロナパンデミックが始まる前までは、世界レベルで人間の交流が活発化し、それが自然に世界的視野の拡大、世界レベルの世界市民意識の形成になってきていたが、突然とまってしまったことに落胆している人は多いのではないかと思う。

このような自由研究、研究発表、ディスカッションをへて、今年度の活動コンセプトを「長岡で体験する『世界』」とすることに決定した。

長岡で世界へのヒントとなる事象を探し世界を学ぶというのが、この基本コンセプトの意味である。

具体的には、世界から長岡・地域にきてくださった方と交流し、それを契機にその方の母国を中心に世界を学習したり、世界の料理文化・食文化を契機にその国や世界を学習するということにした。

少しでも世界を知るきっかけをさぐり、それをヒントに世界を学び、一歩でも、二歩でも、世界的視野をひろげようと考えた。「外」へ出れないなら「内」で勉強すればいいじゃないか、という心意気である。

そして、そのようにして拡大した世界的視野を、地域の方と共有するような活動をし、世界市民意識の醸成に貢献し、わたしたちなりに世界の平和に寄与するという意味も、このコンセプトにこめた。

年間の活動を通じて、わたしたちは学習し、飛躍的に世界的視野の知識を拡大した。

本年度の報告書は、ゼミ活動を「切っ掛け」にして学習した内容を中心にまとめた。

本報告の写真については全て、ゼミ長・鈴木清和の撮影したものである。

2. ウズベキスタンのムミナ女史との交流：ウズベキスタンを学ぶ



中央アジアのウズベキスタンからこられたムミナ女史と交流した。

ムミナ女史は、ウズベキスタンの歴史、文化、国際関係など幅広く、熱心に解説してくれた。

わたしたちが先ず知ったのは、ウズベキスタン、カザフスタン、キルギスタン、アフガニスタンといった、「スタン」とは「地域」という意味だったことである。

ウズベキスタンは近年、日本やアメリカから資本を導入し急速に発展している。

ウズベキスタンと日本は関係が深まり「成田・タシケント間」の航空路線も開設された。

ウズベキスタンはかつてソビエト社会主義共和国連邦（ソ連）という、広大な社会主義体制の超大国の中にあっ

た。当時の時代を知る人のなかには、仕事や社会保障がしっかり提供され安心して人生を送れたと、なつかしむ人も多きいた。

ーウズベキスタンの基本情報ー

面積：44万7,400平方キロメートル（日本の約1.2倍）

人口：3,390万人

首都：タシケント

民族：ウズベク系（84.3%）、タジク系（4.8%）、カザフ系（2.4%）、ロシア系（2.1%）等

言語：ウズベク語・ロシア語等

宗教：主としてイスラム教スンニ派

政治体制：共和制

議会：二院制

―ウズベキスタンの歴史―

古代：オアシス都市が繁栄

紀元前 250 年頃：グレコ・バクトリア王国成立

1 世紀～3 世紀：クシャーン朝

6 世紀中頃：テュルク系遊牧民（突厥）の侵入・住民のテュルク化が始まる。

7 世紀：ソグド人の活動が最盛期に

8 世紀以降：アラブ勢力の侵入・イスラム教の受容

9 世紀後半～10 世紀：サーマーン朝成立（文芸・学問の発展）

13 世紀：モンゴル帝国の支配

14 世紀後半～15 世紀：ティムール帝国（首都サマルカンド）

15 世紀末～16 世紀：遊牧ウズベク集団の侵入・シャイバーン朝

18 世紀～19 世紀：ブハラ・ハン国、ヒヴァ・ハン国、コーカンド・ハン国

1860 年～1870 年代：ロシア帝国による中央アジア征服

1867 年：ロシア帝国タシケントにトルキスタン総督府を設置

1918 年：ロシア連邦共和国の一部としてトルキスタン自治ソヴィエト社会主義共和国成立

1920 年：ブハラ人民ソヴィエト共和国、ホラズム人民ソヴィエト共和国成立

1924 年：ウズベク・ソヴィエト社会主義共和国成立

1989 年 6 月：フェルガナ事件（ウズベク人とメスフ人の民族間衝突）

1990 年 3 月：カリーモフ大統領就任

1990 年 6 月：共和国主権宣言

1991 年 8 月：共和国独立宣言・「ウズベキスタン共和国」に国名変更

2005 年 5 月：アンディジャン事件

2016 年 9 月：カリーモフ大統領逝去

2016 年 12 月：ミルジヨーエフ大統領就任

―ウズベキスタンの国内政治―

初代大統領に選出されたカリーモフ大統領は、1995 年 12 月の国民投票により任期（5 年・2 期）を 2000 年までに延期。2000 年 1 月に再選を果たし、その後、2002 年 1 月の国民投票による憲法改正で任期を 7 年間に延長。

2007 年 12 月大統領選挙で再選。2008 年の憲法改正で任期を 5 年に短縮。2015 年 3 月大統領選で再選。

2016 年 9 月、カリーモフ初代大統領が急逝。上下院は、ミルジヨーエフ首相（当時）への大統領代行職の委任を決定。

同年12月に大統領選挙が行われ、ミルジヨーエフ大統領代行が大統領に就任。就任当初、ミルジヨーエフ大統領は前政権の路線継続を強調したが、徐々に独白色を発揮し、政治、経済、社会、外交等の幅広い分野で改革路線を打ち出している。

議会では「人民民主党」と改称した旧共産党が大勢を占め、初代大統領（当時）を支持していたが、2004年12月に実施された二院制に移行後の議会選挙で、新党「自由民主党」が第一党となった。

－ウズベキスタンの外交－

1990年代以降、ロシア依存を脱却する全方位的外交を展開。2001年9月の米国における同時多発テロ事件後は、国内空軍基地に米軍駐留を認めるなど、米国との関係を強めた。

しかし、2005年5月のアンディジャン事件を受け、事件への対応を批難する欧米各国との関係が悪化し、カリーモフ政権の立場を支持するロシア・中国との関係強化が進んだ。

2005年11月、米軍撤退が完了。

2020年、ロシアが主導するユーラシア経済同盟へのオブザーバー参加を上院・下院にて決定。

－ウズベキスタンの経済－

主要産業：綿繊維産業、食品加工、機械製作、金、石油、天然ガス

一人当たりGDP：約1,700ドル

失業率：約10%

輸出品：金、工業品、食料品

輸入品：機械・輸送機器、工業品

主要貿易相手国：輸出：中国、ロシア、トルコ、カザフスタン、キルギス

輸入：中国、ロシア、カザフスタン、韓国、トルコ

－親日国としてのウズベキスタン－

ウズベキスタンは親日的な国である。

ウズベキスタンが親日国になった背景には、アジア・太平洋戦争終結後に抑留された日本人捕虜が、首都タシケントに建設したオペラハウス「ナボイ劇場」の歴史がある。

強制労働で粗末な食事しか与えられず、休みもほとんどなかった状況でも、日本人捕虜は隊長・永田行夫を中心に働き、手抜きをすることなく、ウズベク人とも協力しソ連4大劇場と讃えられた、中央アジア最大のオペラハウスを完成させた。

また、ウズベキスタンと日本をつないだ代表的な人物として、文化人類学者・国立民族学

博物館名誉教授・加藤九祚がいる。

加藤は65歳で、シルクロードの要所として栄えた三蔵法師ゆかりの地でもあるウズベキスタンのテルメズで遺跡発掘活動を開始し、仏教遺跡の発掘に成功した。

ーウズベキスタンの文化ー

ウズベキスタンの文化は多様な民族や文化が、融合することで形成されてきた。

ウズベキスタンの文化は、活力に満ちて独特である。

それは何千年にもわたって形成され、さまざまな時代に生きたウズベキスタンに住んでいた人々の伝統と習慣が反映されている。

ウズベク文化は、古代ペルシャ人、ギリシャ人、アラブ人、中国人、ロシア人、遊牧民族のトゥルク族など全ての文化の交差点でもある。

ウズベキスタンの多民族性を反映する文化は、音楽、舞踊、舞踊、食文化などに反映されている。

<文学>

ウズベキスタンの文学の歴史は口承の伝統と伝説、叙事詩、おとぎ話から始まる。

わたしたちは、「口承」・「口伝」という形の文化・伝統の継承方法について、ここで再確認した。

ボガティルアルポミッシュと機知に富んだナスレディン・アフアンディの物語は、ウズベク文学の伝統に不可欠である。

中世には、現在の全国民に知られている詩人や作家が登場。

バブル、ジャミなど。その時代のウズベキスタンの文学遺産は詩に満ちており、多くの作品は「愛」、「幸福」、「知恵」をテーマにしている。

19世紀から20世紀には、風刺的、劇的な作品が人気となった。フルカット、ズルフィア、など、有名なウズベク作家が登場した。

<音楽>

ウズベキスタンの音楽は民間伝承やウズベク語の詩と密接に結びついている。

ウズベク人の古代文化の独特な反映ともいえる。

ユネスコの人類の口承及び無形遺産の傑作に宣言されたのが、ウズベキスタンとタジキスタンの独自の音楽、シャシュマカムである。

ウズベキスタンの楽器には、カルナイ、スルナイ、ドゥタール、ドイラなどがある。

<舞踊>

ウズベキスタンの舞踊は、ウズベク人とウズベク文化の「美」を反映する。

ウズベクの民族舞踊は手の動きや顔の表情に独自性があり、他の舞踊とは異なる要素がある。

ウズベキスタンの各地方には舞踊学校がある。

<食文化>

ウズベキスタン料理は、この国の農業形態の影響を受けている。

ウズベキスタンでは穀物を中心とする大規模農場経営が行われており、パンや麺類が主食となっている。

ここから、ウズベキスタン料理の特徴、noodle-rich (麺類の豊富さ)が発生してくるといえる。

牧畜業で羊が多く飼われているため、肉料理ではマトン料理が、ウズベキスタン料理の必須となっている。

アルコールに関しては、ウズベキスタンはイスラム諸国の中では比較的戒律に厳しくないともいえるので、国内に複数のワイナリーがある。

ウズベキスタン最古かつ有名なワイナリーとして、サマルカンドのホヴレンコワイナリーがある。

サマルカンドのワイナリーは現地でとれる品種のブドウを使用した様々な種類のデザートワインを生産している。

まさに、イスラム国といっても決して一様ではない。多様性があることを再確認した。

さらに同様に、世界は極めて多様であることを、わたしたちは理解した。

—中央アジア・国際政治の中のウズベキスタン—

ウズベキスタンは古来、シルクロードの拠点であった。

現在も中央アジアで、最大の人口（約 3300 万人）を擁する。

GDP 規模からみれば、「中央アジアの盟主はカザフスタン」との見方もある。

一方で、中央アジアからロシアやインドの一部、イランまで支配したティムール帝国の隆盛の地がウズベキスタンであった歴史的特性から、「中央アジアの盟主は歴史的にウズベキスタン」という認識をもつ人もいる。

確かに、アラル海を中心にオアシスが広がるウズベキスタンは、歴史的に文明の中心でありつづけてきた。

サマルカンドの絢爛豪華な宮殿等の建物はその象徴といえる。

—ウズベキスタンの宗教—

8世紀、ウズベキスタンにイスラム教が伝わった。

ティムール帝国はサマルカンドに帝都を建設し壮大なモスクを数多く建てた。

ビビ・カネ・モスクは、中央アジアで最も優れたイスラム建築で、完成当時はイスラム世界最大かつ最も美しいモスクと評価された。

3. アメリカのバーゲット氏との交流：トランプ政権の歴史的意味を考察



アメリカからこられたバーゲット氏と交流した。

バーゲット氏からは、近年のアメリカのトランプ政権、バイデン政権について話を伺った。

バーゲット氏は先ず、トランプ政権がアメリカ・ファーストを掲げた背景を、解説してくれた。

トランプ政権以前の時代は、アメリカに中心的拠点をおく「世界的スケールの超巨大財閥」が、安い人件費を利益の土台とするので、かなり無理をしてでも中南米や外国から、「非合法」でも、人を流入させ、米国土内で働いてもらうことをよしとするような、政策がなかば黙認されてきた。

また、「アメリカにある工場」そのものを、「世界の安い人件費を提供する国」に、どんどん移動させて利益を拡大してきた。

このようなことから、むかしからアメリカで働きアメリカをつくってきたと自負する、「中流階級の普通のアメリカ市民」の生活はしだいに苦しくなり、その不満や怒りが、「むかしからアメリカをつくってきたと自負する中流階級の普通のアメリカ市民」の生活を第一にかんがえるべきとする、トランプを2016年に大統領におしあげ、「移民流入の調整」・「米国企業の海外移転の調整」が開始された。

「安い人件費等の世界にある有利な諸条件」を利益の土台にする「グローバリスト」と、「むかしからアメリカをつくってきた中流階級等」を大切にする「アメリカ・ファースト」が対峙しているのが、現在のアメリカで、イギリスのブレグジットやフランス・その他欧州諸国での右派勢力・保守勢力・伝統勢力等の躍進なども、同じような構図が背景になっている、ということだった。

バーゲット氏は、アメリカはチャンスの国として発展してきたから、世界から人を受け入れるのは続けるべきだが、一方で、過度に「非合法」でも法律を無視してでも流入させても平気をしている状況はよくないと、持論を語ってくれた。

わたしたちは、徹底してグローバリゼーションを進め利益を拡大しようとする「スーパーグローバリスト」と、自国の利益をバランスをとって優先すべきという「自国ファースト」という、2つの大きな流れが対峙しているという、「決定的な時代の本質」を理解した。

ーアメリカ・ファーストー

「アメリカ・ファースト」はトランプ氏が、2015年11月のスピーチで、最初に使ったとされる。

その後、トランプ氏は「アメリカ・ファースト」を、スピーチで頻繁に使うようになって行く。

「アメリカ・ファースト」は、2017年12月の「国家安全保障戦略報告書」でトランプ大統領が発表した新しい戦略になった。

「アメリカ・ファースト」の具体的内容に関しては、内政・外政にわたり多様である。

経済政策に関しての「アメリカファースト」は、減税、貿易関税の引き上げ、不法移民の抑制、連邦政府の刺激策の強化などをふくむ。

トランプ政権の「アメリカファースト」経済政策の支柱は、独自の減税政策にある。歴史的な減税の規模は、過去30年間で米国最大となる。

トランプ氏は、製造会社の投資が米国に戻ることを狙った。

つまり、減税で多国籍企業の米国への再投資を促進しようとした。

また、米国企業全般の積極的な投資を刺激することも、狙いにあった。

減税・投資で、企業の利益を増大させ、より多くの雇用を生み出され、米国の経済成長を促進するという経済戦略である。

実際、減税・投資が企業の競争力を高め雇用を創出した。

さらに、米国の税率が低くなれば、世界中の多くの優れた企業が米国にシフトし、米国に定着する可能性もある。

トランプ政権の税制改革の根本目標は、米国経済の成長を刺激し、米国により多くの雇用機会をもたらすことであった。

理論的にも、法人税率が世界で最も低い水準になるならば、より多くの海外の資本を米国に引き付けることができる。

—トランプ政権下の経済成長—

オバマ前政権下での景気拡大期は、実質 GDP 成長率は平均年率 2.25% だった。

これに対して、トランプ政権の最初の 3 年間は、年率 2.5% と高まった。

トランプ大統領就任時の失業率は、4.5% と既にかなり低めの水準にあった。

さらに失業率は、2019 年末、3.5% まで低下した。

トランプ大統領が 2017 年に実施した大型法人減税策等が、企業の投資や労働生産性向上を促し、経済を高い成長軌道に乗せてきていた。

需要の押し上げも、現実化していった。

—トランプ政権の外交・軍事政策—

アメリカの外交・軍事政策は、政権ごとに劇的に変化する。

ブッシュ政権は、2002 年、「国家安全保障戦略」で、敵対国家やテロ組織に対する単独の先制攻撃も辞さない方針を示した。

実際、その後、イラク戦争に突入するなど「一国行動主義」に傾斜していった。

オバマ政権は、「国家安全保障戦略」を 2010 年に発表。

軍事力に依存しすぎず、国際協調を重視する方針を示した。

さらに、2015 年の「国家安全保障戦略」では、気候変動を安全保障上の課題と位置づけた。

トランプ政権の外交・軍事政策は、「中国とロシアとの競争」を強調した点に特徴がある。「競争」という言葉が多用された。ロシアと中国が強力な戦術を取っていることを明確にして、対抗する方針が強調された。

実際、「国家安全保障戦略」では、「インド太平洋地域には、自由と抑圧の 2 つの世界秩序の間での地政学的競争が存在し、中国は米国の権益に挑戦し、安全と繁栄を脅かそうとしている」という趣旨の認識を示した。

優先課題として、中国の軍事的脅威や「一帯一路」に対抗するため、「同盟国や友好国との協力」を促進するという方針を示した。

実際、中国は、アメリカに並ぶほどの軍事力を保有する勢いにある。中国の中距離弾道ミサイル「東風 26 号」は通常弾頭と核弾頭のどちらも搭載できる。

グアムを射程に収めることから「グアムキラー」の別名が付けられている。

その配備数は増えている。

警戒を強めたトランプ政権は、2019年「INF全廃条約」を破棄し、中距離核ミサイルの開発に乗り出した。

トランプ政権のアジア外交は、歴代政権のアジアに対する政策や、オバマ政権下で中国を意識して進められた「アジアへのリバランス政策」と連続性をもっている。

アメリカがアジア太平洋地域において自らの利益を守るため、シーレーンの開放性を守り、民主主義的価値と秩序を促進し、それを下支えするための軍事的サポートを維持する戦略は、超党派的に継続しているといえる。

ートランプ・ドクトリンー

トランプ政権のNSC（国家安全保障会議）次席補佐官、マイケル＝アントンは、トランプドクトリンとは、米国が他国を作り替える事業から手を引くだけでなく、世界各国がそれぞれの主権を重視すべきという考え方であるとした。

ートランプ氏のパーソナル・ヒストリーー

トランプ氏は1946年6月、裕福な不動産開発会社の家庭の4人目の子供としてニューヨーク州クイーンズランド州で生まれた。

少年時代はクイーンズランド州ジャマイカ地方のミッドランドパーク高速道路沿いで生活し、13歳まで父が運営委員を務めていた森の丘地区の学校に通っていた。

その後、ニューヨークの軍事アカデミーに転入。

1964年からフセイン大学に2年間通い、ペンシルベニア大学の経営学部に転校し、1968年に学士号を取得して、父の経営するエリザベス・トランプ・トン・サンに入った。

仕事を通じて、不動産管理や投資などの知識を身につけた。

1970年代から、ニューヨーク州など米国東海岸を中心としたオフィスビル開発、ホテル、カジノ経営などを行う。

1977年、チェコスロバキア人モデルのイワナと結婚。

1983年、新興のプロアメリカンフットボール連盟USFLのニュージャージー・ジェネラルズのオーナーとなる。

1988年、ニューヨークを代表する最高級ホテル「プラザホテル」を買収。しかし、1990年、巨額の債務を背負う。

1994年、資産を売却し、借金を減らし、遊覧船事業や航空事業から撤退。

マンハッタンで所有していた住宅の多くが、中国企業に売却される。現在も中国銀行、ワールドマンサックス、ドイツ銀行などからの巨額の借金を背負っている。

2004年から、ホストとしてNBCのリアル番組「Applentis」に登場。

トランプ社の正社員となるべく番組内で働く出場者に対して、「お前はクビだ」と宣言するセリフが人気となる。

これにより、すでにアメリカ国内で知名度の高いトランプは、その知名度をさらに向上させた。同番組の出演は、大統領選挙出馬前の2015年6月まで続く。

2017年1月20日、第45代米大統領に就任。就任時の年齢は70歳。第40代大統領ロナルド＝レーガンの69歳を上回った。

2021年1月19日、トランプ氏は辞任のビデオ声明を発表。4年間の業績を訴え、「新政権が米国の安全と繁栄を維持することを望んでいる」と述べた。

次期大統領のバイデン氏の就任式に出席するかどうかについて、在職中の2021年1月8日、ツイッターで「就任式に出席するつもりはない」としていた。

1869年以来152年ぶりに、旧大統領が新大統領の就任式に出席しないことになる。

トランプ氏は1月20日、バイデン大統領の就任式に予告通り出席せず、アンドリュース空軍基地で退任式を行った。

大統領だけが操作権限を持つ「核ボタン」は、通常就任式で直接継承されるが、今回はトランプ氏が出席しなかったため、2つのボタンが用意され、バイデン大統領就任の瞬間にトランプ氏のものを無効化した。

4. インド料理店創業者ビマール氏との交流：インド・ネパールを学ぶ



インド料理ニサンの創業者、ビマール氏と交流した。

ビマール氏はネパールの方で、10年以上前にインド料理のお店ニサンをはじめた。

ビマール氏からネパールとインドについて話をうかがった。

ネパールとインドはとても近接し、歴史的、文化的に似ていて、同じ源流をもつ国だということを知った。

ネパールとインドには多様な宗教があることを知った。

仏教、イスラム教、ヒンズー教、ジャイナ教、シーク教、ゾロアスター教など。

ネパールとインドは、世界的な複数の超大国などによる覇権争いの時代にあって、とても重要な位置にあることも理解した。

これからの世界超大国・中国とインドは近くに位置している。

北方の超大国・ロシアとインドは、長期に渡って緊密な関係にある。

このような背景から、インドは「中国とロシアを中心にした対米戦略協商・上海協力機構」のメンバー国になっている。

しかし一方、世界最大人口での民主的選挙を実施するインドは、民主主義を大切にする民主国家として、価値観の面でアメリカ・日本・西欧諸国などと一致する。

ここからインドは「アメリカを中心にした対中国・ロシア協商ネットワーク・クワッド」に入り、日本、オーストラリアとも緊密な関係をもっている。

インド料理店ニサンのシェフのサンカルー氏、バハドゥア氏から、本格的なインド・ネパール料理を教えてもらった。



インド・ネパール料理は、サモサ、モモ、ティッカ、シェクワ、シークパパブ、ナン、パバドゥ、ラッシー、クラブジャム、ビリヤーン、キーマ、タンドリーチキン、チャイなど、豊富である。

その料理の多様さ、豊かさに、圧倒される。

まさに、インド・ネパール・エリアの歴史の長さ、深さ、深遠さを反映するのが、インド・ネパール料理だと確信した。



ちなみに、仏教の強固な歴史的土台、イスラム教の強固な歴史的土台がある、インド・ネパ

ールでは、ビーフとポークは食べないのが原則で、料理には、チキンやマトン（ラム）がつかわれるのが主流。

わたしたちは、その国・エリアの「歴史」というファクターが、市民が毎日食べる料理にまで影響する現実を体験し、いかに「歴史」というファクターが世界を理解する上で大切かを理解した。

ーインドの基本情報ー

インドは中国に次いで2番目の人口の多さを誇る人口大国である。

人口は2020年段階で、13億8000万人。

労働力人口の3分の2が農業に従事している。

インドの国土面積は世界7位。日本の約9倍。農用地面積では約40倍。

農用地面積が国土の約半数を占めている。そのうち約6割で穀物を生産している。

広大な国土と多い人口を生かし、農林水産業はとても盛んである。主要農産物には、サトウキビ、コメ、小麦、バレイショ、バナナ、マンゴ ー等がある。

インドの輸出品には、米、綿、粗製生産品、大豆油かす、精製糖がある。その中でも米のシェアが約20%。

インド経済は1991年から改革を加速している。改革により、IT産業、自動車部品・電機・輸送機器といった分野が伸びている。

バイオ・医薬品などの産業の発展も勢いがある。

2003年以降、年間7～9%と高い経済成長率を実現している。

ーインドの石油・エネルギー産業ー

リライアンス・インダストリーズ社が1999年、世界水準の製油所を建設して以降、石油産業が発展している。

2002年、東海岸沖合の深海で大規模な天然ガス田が発見される。

2004年、ラージャスターン州で複数の油田が発見される。

インドは全体の需要を上回る石油製品の生産能力を保有するようになり、石油製品の輸出となっている。

また、中東の産油国と距離が近いことから、中東原油を使用した石油精製産業も盛んになっている。

ーインドとダイヤモンドー

インドはダイヤモンドの国として有名である。

古代、インド各地にある河川では「硬い石」が発見されてきた。

「インド石」と呼ばれるようになっていった。

世界的視点では、1700年代前半、ブラジルでダイヤモンドの鉱石が発見される。

原石のままでは、ただ硬いだけで美しくない石だが、磨く方法がベルギーで発明された。

以来、ダイヤモンドは宝石としての価値を持つようになる。

インドはダイヤモンドに関して、産出、研磨、流通、販売の点で、主要な世界的拠点になっている。

ーインドの歴史ー

<古代インド>

インドの歴史は長い。

インダス文明よりかなり前から、人間の生活が営まれていた痕跡が発見されている。

初期文明の多くは、川の近くの豊かな土壌と水を糧に発展していった。

インドには、ガンジス川とインダス川という長い川がある。

紀元前 2600 年頃、インダス川領域にインダス文明が起こった。

インダス川はヒマラヤ山脈中央を源流とし、現在のインド西北部からパキスタンを通過してアラビア海に注ぐ、全長約 2900km の大河。

インダス文明の遺跡は、約 2600 カ所でみつまっている。

代表的なものは「モヘンジョダロとハラッパーの遺跡」である。モヘンジョダロはインダス文明の都市の中で、最大規模であったと推定されている。

インド・ヨーロッパ語族に属するアーリヤ人が南下してインドに進出する。

鑄造技術に優れ、馬が引く 2 輪戦車を操っていたアーリヤ人は、戦いに強かった。

アーリヤ人がインダス川流域に進出した際、その一帯を「シンドゥー」と呼ぶようになったという。

その言葉が、ペルシア、ギリシアに伝わり、「インドス」という言葉が生まれ、現在の India (インド) になったと考えられている。

紀元前 1000 年頃から、アーリヤ人はガンジス川の流域へと移動した。そこで生活していたドラヴィダ人を支配下に治めた。

アーリヤ人は、この先住民から「稲の栽培」を学び、農業中心の生活へと変化させ豊かになる。

<ムガル帝国の発展>

1526年、デリー近郊のパーニーパットの戦いで、バーブル率いる軍がロディー朝を破り、ムガル帝国が成立する。

初代皇帝バーブル 2代フューマンと続く。

3代皇帝、名君アクバルが帝国の基礎を固める。アクバルは宗教にも寛容で、ムスリムとヒンドゥー教徒との融和をはかる。

ムスリムへのジズヤ(人頭税)を廃止し、婚姻や同盟で諸侯を味方につけた。アクバルは、インド西部を制圧して版図を広げ、アグラの西に建設したファテプル・シークリーに都を移した。

1576年、ベンガル地方を制圧した。

都をラーホールに移した。アフガンを平定し、再びアグラに都を戻した。

アクバルは、「騎兵や騎馬数」にリンクした「マンサブ(官位)」や「ジャーギール(給与地)」を中心にした、「マンサブダラー制」という制度を構築した。

諸制度を整えることによって、皇帝に権力を集中させる中央集権体制を確立させ、帝国の基盤を固めた。

4代皇帝ジャハーン・ギール、5代皇帝シャー・ジャハーン、6代皇帝アウラングゼーブと続く。

シャー・ジャハーンの時代に帝国は最盛期を迎えた。

文学、美術、建築の傑作が生まれた。

<ムガル帝国と欧州「大航海時代」>

ムガル帝国が成立した前後、ヨーロッパ人がアフリカ大陸喜望峰を回る航路を開拓し、続々とインド方面に渡航するようになる。

1600年代以降、欧州ではインド方面との貿易を促進しようと、「東インド会社」が設立されていった。

マドラス、ムンバイ、カルカッタの3大拠点が発生してくる。

先行したイギリスの東インド会社に対抗し、フランスにも東インド会社が1664年には設立された。

イギリスとフランスの戦いが始まる。

イギリスはインドでの、フランスとのプラッシーの戦いで勝利し、イギリス優位を確立させる。

1707年、ムガル帝国のアウラングゼーブが死去した頃、帝国は求心力を失いはじめた。帝国の権威が衰え、各地の領主が独立傾向を強めた。

いつの時代も「帝国の求心力が衰退し周辺パワーが独立志向を強める」のは帝国衰退の象徴的現象であった。

逆に、「帝国の求心力が増すこと」が帝国隆盛の象徴的現象である。

独立志向を強めた領主は、イギリス東インド会社と戦いを挑みはじめた。マイソール戦争、マラーター戦争など戦闘があったが、全てイギリス側が勝利した。

<イギリス産業革命とインド>

18世紀後半、イギリスで産業革命が起こり、紡績機を使った綿織物も大量生産が可能となる。

イギリスは、それまでインドから「手工業による絹織物」を輸入していたが、逆にインドに向けて、「機械工業による絹織物」を輸出するようになった。

これによってインドの手工業は大打撃を受ける。

さらに、イギリスはインド農村で、ジュート、コーヒー、アヘンなどの商品作物を広め、それを転売し利益をあげるビジネスを促進した。

アヘンなどは主に中国に転売された。

なおこれが遠因で、アヘン戦争が勃発することになる。

1857年のインド大反乱を経て、1858年インド統治法が成立し、インドはイギリス領となる。「英領インド時代」の開始である。

イギリスのインド統治はインドの富を奪う面があり、インドで自治権拡大を求める声があり、独立運動がはじまるようになる。

第2次世界大戦後の1947年、インドは独立を果たす。

その際ムスリムの多い地域は、パキスタンとして分離独立した。

—ネパールの宗教—

ネパールといえば、世界三大宗教の一つ、仏教の発祥地である。

釈迦牟尼仏の生誕地がある国と想起する人も多い。

ネパールの社会生活の中心に宗教がある。現在では、ネパール人口の90%はヒンズー教徒、7~8%は仏教徒、その他が1~2%である。

ヒンズー教はネパールの国教となっている。しかし、ネパールではヒンズー教と仏教が混在しその教えが相互に浸透している面があり、一人が複数の宗教的要素を持つようになっている。

ヒンズー教ではシッダールタをヴィシュヌの化身とみなしている。

ネパールでは、神の掟に従い貢ぎ物や宗教儀礼を通じて神に慰められることが、日常生活の重要な一部となっている。

誰もが自分なりの方法で宗教活動に参加している。

ネパールのヒンズー教徒は、インドのヒンズー教徒ほどカースト制度やカースト意識が

厳しくない。

釈迦はネパールで生まれ、仏教はネパールで重要な位置を占めている。

ネパールにヒンズー教が伝わる以前から、仏教がネパールに広がり支持されてきた。

カトマンズ渓谷にはネパール仏教の栄華を象徴する仏教建造物が数多く建っている。ネパール仏教は大乗仏教。菩薩の教えに従うことで「涅槃」に至るという考え方が中心となっている。

タマン族、グルング族、シェルパ族など高山に住む民族や部族を中心に、現在も仏教は信仰されている。

タントラは後期大乗仏教とヒンズー教の教えの融合から生まれた。インド北部で生まれ、ネパールで重要な位置を占めている。

13世紀、イスラム教徒がバングラデシュやビハール州に侵攻したとき、多くの仏教徒が経典や遺品を持ってネパールやチベットに避難した。

多くの仏典や写本が保存されることになった。インド人仏教徒の流入は、ネパールの仏教の繁栄に貢献した。

11世紀中期から15世紀初頭にかけて、チベット仏教の多くの宗派が形成された。サキャ派、ニンマ派、カギユ派のカルマ派など。

ネパールはヒンズー教を国教としているが、政府は仏教を保護する方針をとっている。伝統的な仏教に加え、南方仏教も導入されるようになる。

1944年、ネパールの僧侶たちは、インドのカノエンとカトマンズのシュリジャ僧院に仏教復興協会を設立する。

南部テラワダの普及、ネパールの新しい南部型レンガ僧院の建設、多くのパーリ語経典と研究の翻訳と出版を進める。

1954年、ビルマの第6回仏教コンベンションにネパール仏教代表団が参加した。

ユネスコの支援を受け、釈迦の生誕地・ルンビニの修復も進んだ。

1980年代前半で、ネパールの仏教徒は86万7000人、人口の約6.1%。大半が北東部と中央部に集中。山岳地帯の北東部では、チベット仏教を信仰する仏教徒が大半を占めている。

中国人の中にも、チベットとの宗教的なつながりが深い人がある。1956年、中国政府とネパール政府の間で、両国間の仏教徒の旅行や巡礼を促進するための協定が結ばれた。

一大英帝国と近代ネパール

英国がインド支配を進めた後、イギリス東インド会社は徐々に北に向かって進み、ブータンなどの周辺国に入った。

1791年、イギリス東インド会社はネパールと「貿易協定」を結ぶ。

1814年、イギリス東インド会社はインドとネパールの国境紛争を口実に、ネパールに侵入するため軍隊を派遣。ネパール軍は抵抗したが、結局イギリス軍に敗れた。

1815年、ネパールはイギリス東インド会社とスガウリ条約に署名。南方領土の大部分をイギリス領インドとイギリスに譲渡した。

1923年、英国はネパールの独立を承認。英国とネパールは「恒久的な平和と友情の条約」を締結した。

—ネパールの現代政治—

1979年、ネパールで全国的な学生運動と政治的暴動が発生。ビレンドラ国王は、改革された評議会システムを維持するか、複数政党制を実施するかなどを決定する国民投票を行うと発表。

1980年、国民投票が行われ、その結果、議会制度支持は54%の過半数を獲得。

1981年、国民議会最初の総選挙が直接の成人選挙権に基づいて行われた。

1986年、国民議会の第2回総選挙が行われた。

1990年、大規模な「人民運動」が全国的に勃発。

ビレンドラ国王は立憲君主制と複数政党制の導入を決定。

2008年、ラム・ヤダブはネパール共産党（マオイスト）によって指名された大統領候補・ラム・シンをネパール憲法議会で、308票対282票で破り、ネパール初代大統領に選出された。

5. ベトナムのエン女史との交流：ベトナムを学ぶ



ベトナムのホーチミンからこられ、「サイゴン」というベトナム料理店をひらかれたエン女史と交流した。

エン女史との交流から、私たちはベトナムを深く学習した。

ベトナムにはフエの王朝に代表されるような、多数の王朝の歴史がある。

ベトナムの北方の中国の影響も大きく、漢字が使われていた時代もある。

さらに、1800年代からはフランスの覇権の下での「フランス領インドシナ」の時代も体験する。現在のベトナムの文字はフランスの影響でヨーロッパ式の文字になっている。

ホーチミンというソ連派の強力な指導者のリーダーシップで、北から社会主義国として変化していったベトナムは、第2次大戦後の米ソ冷戦時代には、ソ連側の社会主義陣営の国家となった。

その歴史から現在でもベトナムの政治体制は、かつてのソ連型の一党体制が継続されている。

1986年以降、政治制度は社会主義的一党制度を継続するが、経済は外国から資本を大胆に導入し自由資本主義経済にシフトするというドイモイを開始し急速に発展した。

エン女史から、多数のベトナム料理について、教えていただいた。ベトナム料理は、バインベオ、バインボツロック、ゴイクオン、フォーなど、とても豊富で独自性がある。ベトナム料理は、独特なあっさりとしたテイストのものが多く、わたしたちは心から感銘した。



—ベトナムの輸出品—

ベトナムの輸出品と聞いて、思い当たるのが特にない人もいるかもしれない。

実際は、縫製品、水産物、輸送機器・部品、機械設備・部品、木材・履物など、ベトナムの対日輸出品は豊富である。

こんなにも沢山、ベトナムは日本に輸出している。

他の地域には、洋服、靴、シーフード、電化製品、携帯電話、コーヒーなども輸出している。

種類が豊富である。

ベトナムの輸出品の中でも、縫製品と水産物、履物が気になる。

縫製品について、柄が日本と違って変わっている。日本人の人があまり使わないタイプがある。

縫製品には、カーペット、カバン、スカーフなどがある。

どれも、オシャレな柄が多く、独自性を感じる。

日本では、華やかな色合いがあり、それにあった織物がある。花とか模様を入れて綺麗にするデザインである。

ベトナムでは、花のようなデザインはあまり入れず、「線とか曲線」を強調的にして、綺麗なものとまとめている。

色合いについては、日本はタッチが薄い、ベトナムは濃い。

ベトナムの独自の美的センスを理解し、世界にはおそらく、多様な美的センスがあるのだろうということを理解した。

ーベトナムの歴史ー

<ベトナム史概略>

ベトナムの歴史は旧石器時代から始まる。

ベトナムの国土にも古代の人間活動の痕跡があった。

猿人歯、旧石器時代の道具、石器、竹木器、陶器などが発見されている。狩猟や採集で、生きていたと思われる。

紀元前3世紀末期から10世紀前期まで、ベトナムは中国統治下にあった。中国文化が大量に入った。ベトナムの封建化に重要な影響を与えた。

938年、呉権は白藤江の戦いで中国南漢の軍隊を打ち負かし、ベトナムの独立過程における重要なステップをつくった。

ベトナムは封建時代に入り、丁朝、前黎朝、李朝、陳朝、胡朝と、発展した。

1600年代以降、中国明朝等の影響を受ける。ベトナム各地では、支配者は中国式の制度を用いて各地を治め、文化面では儒教、仏教、道教の三教が融合した。

1800年代中期以降、フランスがベトナムを徐々に植民地化して行った。

第2次世界大戦時、日本が支配した。

一方、第2次世界大戦中から、米国・中国は戦後のベトナム対応を協議している。カイロ会議で、蒋介石はルーズベルトとベトナム独立問題を討論した。蒋介石は、ベトナムをフランスに戻すことに反対。ルーズベルトもインドシナをフランスに返還することに反対。ここには、フランスのドゴールへのルーズベルトの否定的な見方などが影響していたのかもしれない。

1945 年、ベトナム北方にベトナム民主共和国（北越）が樹立される。

1975 年、北越が全国を統一。

1976 年、ベトナム社会主義共和国と改名。

1986 年、革新的な開放戦略ドイモイが開始。

<第 2 次大戦後・冷戦期のベトナム>

1945 年 8 月 15 日、日本が第 2 次大戦で降伏。ベトナムで全国総蜂起が発生。ホーチミンは 9 月 2 日、ハノイ巴亭広場で独立宣言。ベトナム民主共和国（北越）の樹立宣言である。

しかし、ベトナムの独立はフランスによって干渉される。フランス政府は 7 万の遠征軍を組織しインドシナに緊急派遣。

1949 年までの中国国共内戦期間中、ベトナムは軍を派遣して中国共産党に協力。中国共産党が中華人民共和国を樹立。ベトナムは、「両国は数千年の歴史の兄弟関係。共に世界を守ろう」という趣旨のエールを送る。

1950 年代まで、ソ連・ベトナム・中国には、「世界的な共産主義共同体」としての団結の意識があった。しかし、その後、中ソ対立が発生。この団結はうすれて行く。

1954 年、インドシナの平和回復に関するジュネーブ協定が締結。ベトナム北方は解放され北越が統治。南方はフランスが統治。その後、南方へ米国が入る。

1961 年、ベトナムの対米救国戦争開始。

1973 年、ベトナム戦争終結。平和回復に関する協定がパリで締結。米軍は南方から撤退開始。

1975 年、北越が全国統一。

1976 年、ベトナム社会主義共和国と改名。

1979 年、ベトナムはソ連の支援を受け中国との国境地域で戦争を起こす。中越戦争。中越両国は 10 年に及ぶ国境での緊張関係を体験。

1986 年、革新的な開放戦略ドイモイが開始。

1989 年、ベトナムがカンボジアから撤退。

1990 年代、中越関係は好転。米国もベトナムに対する一部の経済封鎖を解除。ベトナムは欧米諸国への経済貿易関係を開き経済を急速に発展させる。

—ベトナムの政治制度—

ベトナムは 1946 年憲法、1959 年憲法、1980 年憲法、1992 年憲法の 4 つの憲法を公布した。

1992 年 4 月 15 日にベトナムの 8 期国会の 11 回の会議で採択された現行憲法はベトナム

ムの政治制度の性質と内容について詳しく規定。

ベトナムは社会主義国家であり、「ベトナム共産党は国家と社会を指導する力」であり、「国家のすべての権力は人民に属する人民代表制度」を実行するとなっている。

「ベトナム社会主義共和国は人民のために設立され、人民のための人民民主国家であり、国家のすべての権力は人民に属し、国家は労働者、農民及び広範な知識人からなる連盟を基礎としている」。ここに、「マルクス・レーニン主義」の伝統があることがわかる。

2001年の第10期国会10回会議は憲法の一部条項を改正し、ベトナムが「社会主義指向」の市場経済を発展させることを決定。

国家主席はベトナムの国家元首。国家主席は国会の投票選挙によって選出され、任期は国会の各任期と同じ5年。国家主席は武装部隊司令官と国防と安全委員会主席を兼任し、全国の武力を統率。

一ベトナムにおける統治政党一

ベトナム社会主義共和国は一党制を実行している。ベトナム共産党はベトナム唯一の政党であり、「国家と社会の指導力」、統治政党である。ベトナム共産党の指導下に、社会団体や大衆組織がある。ベトナム共産党の歴史は長い。

1929年、インドシナ共産党が成立。

1930年、ホーチミンの指導の下で、インドシナ共産党、安南共産党と新越共産主義連盟は香港九龍で会議を開き、ベトナム共産党を合併して構成。陳富を中央委員会総書記に選出することに合意した。

同年10月、ベトナム共産党は中央第1回会議を開き、ベトナム共産党を「インドシナ共産党」と改名することを決定。

1945年8月、インドシナ共産党は「8月革命」を指導し、ベトナム民主共和国を設立。

1951年、インドシナ共産党は第2回全国代表大会を開き、党の名称を「ベトナム労働党」に改名。ホーチミンはベトナム労働党中央委員会主席に就任。

1976年12月、ベトナム労働党は「ベトナム共産党」と改名。

1986年12月、ベトナム共産党は第6回全国代表大会を開催。大会は1976年以来の社会主義建設における経験と教訓を真剣に総括し、党の仕事の重点を経済建設に移すことを決定し、全面的な改革開放路線を決定。

一ベトナムの食文化の特徴一

食文化は、その国の地理的特性、歴史的特性を反映するもので、とてもおもしろい。

ベトナムの食文化も、ベトナムの地理的特性、歴史的特性を反映し、ベトナム独自の伝統文化の重要な構成要素として、長期にわたって発展してきた。

ベトナム料理は、テイストがあっさりしているところに、特徴があるようだ。

ベトナムの主食はお米で、お米を利用した豊富な料理がある。お米が複数回収穫できるという、地理的特性を反映していることがわかる。

6. タイのアノン女史との交流：タイを学ぶ



タイからこられ「アノン」というタイ料理店をひらかれた、アノン女史と交流した。

アノン女史との交流から、私たちはタイを深く学習した。

タイは長い歴史をもち、近代以降の西洋大国による植民地化の時代にあっても、独立を維持した。

タイはマレー半島に広がる南部から、北方の山岳地帯まで、南北に広大な国土をもつことを理解した。

タイの方が尊敬しているのは、ラーマ9世、プーミポン国王。

プーミポン国王は国民の中にとびこみ、励まし、タイをよりよくしようとした名君。

1990年代のアジア通貨危機で、タイ経済が壊滅したとき、自らつつましい生活を実践し、「いまあるもので満足して生きよう」という「セータキットポーピアン」を提唱した。

アノン女史からタイ料理の代表的料理を教えていただいた。トムヤンクン、グリーンカレー、パッタイなどである。



ータイの歴史ー

タイにはかつてアユタヤ王国、ランナー王国などがあった。2つの王国は、クメール帝国などとの戦いの歴史も体験した。

アユタヤとランナーがいくつかの隣接するパワーを含め、サイアム王国を形成。サイアムは文化と経済の発展に成功した。

ピアチャクリット王(ラーマ1世)は、首都を南に30キロ離れた別の都市に移した。1932年、平和的な革命を経てサイアムは立憲君主制になる。

義務教育が実施された。また、「名前」だけしかなかったタイ人の多くは、「氏名」をもつようになった。これは人権の向上でもあった。

1939年、サイアムはタイ王国に改名された。

ータイの文化：ナマステとニーリングー

タイは独特の文化を持つ国である。

タイ人はナマステとニーリングを通して敬意を表する。

ナマステとニーリングによって、体の姿勢を下げ、謙虚さと相手への敬意を表し、上位者には忠誠をあらわす。

タイ人の親切・オープンマインド・助け合い・トラブル回避・礼儀正しさといった高いレベルの国民性の象徴的作法が、ナマステとニーリングであろう。

ータイの文化：キックボクシングー

キックボクシングはタイのスポーツ文化の代表。

人体の拳、足、膝、肘の四肢八体を八種類を攻撃力にする格闘技である。

タイのキックボクシング(ムエタイ)は変化が多く、組み合わせのモードが豊富で、強力な「戦闘スキル」として世界的に紹介されている。

ータイの宗教ー

タイの国民の90%以上が仏教を信仰している。少数であるが、イスラム教、キリスト教、ヒンズー教などを信仰する人もいる。

タイには3万以上の寺院と30万人以上の僧侶がいる。中央政府には宗教省があり、王室の僧侶が大臣を務めている。

現在、世界のさまざまな国で販売されているたばこの箱に「喫煙は健康に有害」という言葉が見られが、タイでは、たばこの箱に「僧侶にたばこを与えるのは罪」と書いてある。タ

イが敬虔な仏教国家であることを象徴する現象である。

タイの僧侶は黄色いローブと赤いローブを着る。ほとんどは絹でできている。

黄色と赤は非常に目を引く色である。

タイの仏教は、僧侶になったあと世俗の世界に戻ることに對して、非常に寛容である。実際、僧侶になり世俗の世界に戻り再び僧侶になる信仰者もいる。

7. フェアトレードの学習



世界の発展途上国のさまざまな商品を輸入し、それらを適切な価格で買うことで世界平和を進めるフェアトレードについて学習した。

長岡の有名なフェアトレード・ショップ・らなぶうを訪問した。

らなぶうでは、インドネシア・バリから輸入した石鹸をはじめ、海外のカバンなど、とても興味をひく有益なフェアトレード商品を販売している。

世界の発展途上国のさまざまな商品のショッピングを通じて、世界の仲間と一緒に、平和へと前進できるということを知り感動した。

8. 地域での国際理解推進活動 I：市民リーダーとの学習会



わたしたちは地域で発見した「世界に関する知識（世界的視野）」をわかりやすく、親近感がわくようなかたちで、市民の方に紹介できないか考えるようになった。

わたしたちなりの地域への国際理解推進の挑戦だった。

「料理文化・食文化を通じて世界を学ぶ」という企画で、地域で活躍する市民リーダーの方たちと世界の料理を試食しながら、世界についてまなぶ学習会を開催した。

まず「インド料理」を中心にして開催してみた。

皆さんに、インド料理を紹介した。

インド料理というと、「カレー」しかイメージがなかった多くの方は、大変種類の多い豊かなインド料理に大感動してくれた。

インド料理を楽しくたべながら、インドの長大な歴史、現在、未来について、世界地図を広げながらみなでまなび活発なディスカッションをおこなった。

参加した方から、「おいしいインド料理を食べるなかで、インドにとっても親近感がわき、インドが好きになりました」という、感動の声をいただいた。

「特定の外国の料理」を楽しく食べる中で、その外国に親近感がわき、その外国が好きになるんだと確信した。

「料理文化・食文化を通じた世界平和」というコンセプトがみえた瞬間だった。

9. 地域での国際理解推進活動Ⅱ：児童養護施設での国際理解推進の取り組み



児童養護施設でフランスの食文化を入口に、国際理解推進活動に挑戦した。

テーマは「お菓子・ケーキ大国フランス」。

フランスは、ババロア、スフレ、エクレア、チュイール、ダッグワーズ、フロランタン、

タルト、モンブラン、マドレーヌ、ショコラ、フィナンシェなど、数多くのお菓子、ケーキを生み出した、世界一の「お菓子・ケーキ大国」。

施設でフランス発祥のお菓子を紹介し、それを「入口」に、フランスに関心をもってもらい、そこからフランスのことを、ヨーロッパ全体と関係させながら説明した。

まとめ

年間の活動を通じて理解したことは、一般的に一方的に流される「他人がつくった情報」だけにたよっても、それは「現実」・「全体」の一部でしかない場合が多く、「本質」や「全体像」が把握できるわけではないという一点であった。

やはり、可能な限り自分で体当たりで「体験」することが最も大切で、その「体験」によって強い「実感」が発生し、それを契機にさらに深く広く学習・研究することで、強固な視野・知性の土台ができ、自己のレベルアップになって行くことを確信した。

今年度も、コロナパンデミックの影響により、色々なことで影響が出た。今までしてきたことが出来なくなった面もあった。

しかし、その中でも、わたしたちは、断固強気で前進した。その意義は大きい。

「狭くされた時代環境」の中でも、上昇志向で進める人間が未来に勝つと確信する。

わたしたちは、世界の方と交流をして、何より「たくましさ・強さ」を実感した。

自分たちも頑張らないといけないと感じた。

確かに、何か自分の近くに、「生きる糧」・「生きる上でのパワー」・「エンパワーメント」という「武器」・「ストロング・ファクター」を持っている人は強い。

包括的に体験し、学習する中で、そんなことを考えるようになった。

これからも、自分の個性を大切にし、深く考え、世界を視野に入れて、生き抜きたい。

人間は、宇宙史 138 億年・地球史 46 億年・人類史 700 万年という、長大な時間認識をもつに至った。人間は、長大な歴史の中で、「考え方・生き方・習慣・慣習・モノ・制度・法律・学問」など、広義の「文化」といえるものを、多様多数生み出してきた。

それら広義の「文化」の多くは、時代の権力者層・統治者層が、安定などの何らかの意図をもってつくった面も多く、ほとんど全ては、長大な歴史の中であって、「一時的につくられた産物」ともいえる。

一方、グローバル化する時代では、それら「文化」こそ貴重な各国の価値ともいえ、深く学ぶに値する対象であることも間違いない。

フランスの哲人指導者シャルル＝ドゴールは、「ラサンブルマン」という言葉が好きで、スピーチなどでよく使った。

「ラサンブルマン」とは、違いや分裂を乗り越えて、協力してあつまり、共に団結して、

より高いレベルに進もうという、「結集」という意味のフランス語である。

ドゴールは、フランスの歴史や文化を誇りにし大切にするとともに、世界のどこにあっても、その国の独自の歴史、文化、方法など「ナショナルアイデンティ」を最大限に尊重した指導者だった。

わたしたちは、世界レベルでの「ラサンブルマン」の必要性を訴えて行きたい。

謝辞

今年度のゼミ活動にお力添えして下さった方々、全員に御礼申し上げます。

特に、長きに渡りゼミのアドバイザーを請け負っていただいている、グリーン・フィロソフィー代表大出恭子様、フェアトレードショップ・らなあふうオーナー若井由佳子様には、最初から最後まで細部に至るまでご指導して頂きました。

重ねまして、今年度ゼミ活動にご協力して下さいました皆様全員に御礼申し上げる次第であります。

長岡大学 学生による地域活性化プログラム 各プロジェクト報告書

1. 栃尾地区活性化に向けたにぎわい創出事業：にぎわい創出プロジェクト
～布の森 in 白屋堂～
石川英樹ゼミナール（1）
2. クイズラリー開催、SNS による栃尾PR
石川英樹ゼミナール（2）
3. 十分杯を世界に知らせよう！—動画制作を通して—
権 五景ゼミナール
4. きもの文化村構想の試み
～十日町地域における新たな可能性～
喬 雪氷ゼミナール
5. オープンファクトリーで長岡を活性化！
栗井英大ゼミナール
6. グラスルーツグローバル化～
—草の根・地域からの人類一体化の推進—
広田秀樹ゼミナール
7. 小学生のプログラミング教育を通じた地域活性化活動
高島幸成ゼミナール
8. 主体性を礎にした、ネットに頼らない情報の収集と課題の探索
武本隆行ゼミナール
9. デジタル・情報技術を活用した地域の財・サービスの情報発信
坂井一貴ゼミナール
10. コロナ禍における「まちの駅」の新たな交流・連携のあり方を考える
鯉江康正ゼミナール
11. 長岡市摂田屋の魅力高め、観光客を増やし、地域活性化を図る
～イベントプロジェクト～
生島義英ゼミナール（1）
12. 長岡市摂田屋の魅力高め、観光客を増やし、地域活性化を図る
～情報発信プロジェクト～
生島義英ゼミナール（2）

令和3年度 学生による地域活性化プログラム 広田秀樹ゼミナール活動報告書

【発行日】 令和4年3月30日

【発行人】 村山 光博

【発行】 長岡大学

〒940-0828 新潟県長岡市御山町80-8

T E L 0258-39-1600（代）

F A X 0258-33-8792

<https://www.nagaokauniv.ac.jp/>